

iUP

Ibaraki University Press

6



「特集」茨大生が創る地域の未来

茨城を 授業する

って、マジっすか。



ALUMNI わが誇りの先輩たち

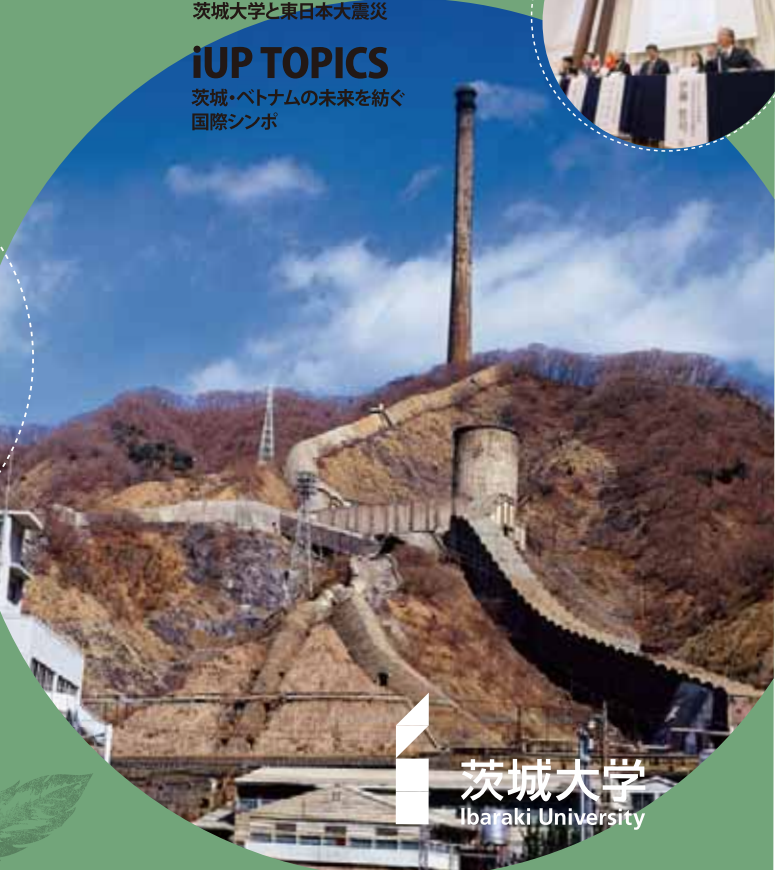
コーヒー焙煎士 小山 彰一さん

震災から5年

茨城大学と東日本大震災

iUP TOPICS

茨城・ベトナムの未来を紡ぐ
国際シンポ



茨城大学
Ibaraki University

CONTENTS

- 03 特集 茨大生が創る地域の未来
「茨城」を授業するって、マジっすか。
- 04 茨城の近代工業化の光と影
今、日立鉱山の煙突に問う。環境とは、ものづくりとは。
工学部教授 伊藤 伸英
- 06 「茨城学」、全学一丸の地域連携教育の試み
- 12 「阿見町×茨城大学」の地域ブランドを創りたいですね。
阿見町長 天田 富司男
ローカリズムあつてのグローバリズム
木内酒造合資会社取締役 木内 敏之
「茨城」を通じて、自らの地元を相対化する視野を
社会連携センター准教授 清水 恵美子
- 14 PROFESSOR INTERVIEW
中村 麻子・理学部准教授 小林祐紀・教育学部准教授
- 18 our ゼミっ!
谷口基ゼミ(人文学部) 村上哲ゼミ(工学部) 安江健ゼミ(農学部)
- 20 PHOTO BREAK 一瞬ひととき
- 22 ALUMNI わが誇りの先輩たち コーヒー焙煎士 小山 彰一さん
- 26 震災から5年 茨城大学と東日本大震災
学生インタビュー「The 茨大生」 小野田 明さん
座談会 「災害に学び勝つ」 人文学部教授 伊藤哲司/
農学部教授 小松崎将一/工学部准教授 信岡尚道
- 30 introducing ふぞく「特別支援学校」
- 31 iUP TOPICS
IBARAKI UNIV. PRESS 茨城・ベトナムの未来を紡ぐ国際シンポ
OBカメラマン金田幸三のキャンパス探訪 @水戸キャンパス
わたしの仕事 堀口真理(学生就職支援センター)
Why don't you write in English? 英語で書いてみよう!
イバダイガジェット「ポータブル環境測定器C2D-PEM01」
チェコの車窓から 森下嘉之・人文学部准教授
- 38 研究に恋して「宇宙天気予報」
編集後記
- 39 サークル紹介 車椅子バスケットボールチーム

特集 茨大生が創る地域の未来

「茨城」を 授業する

って、マジっすか。

「茨城学」は、平成27年4月に開講した、本学の新しい試みだ。文部科学省の「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に本学が採択されたのは、平成26年の7月のこと。内田聡・現学長特別補佐を中心に、三村信男学長就任当初から「茨城学」を含むCOCの事業が進められた。

COC事業採択後、10月にCOC地域志向教育プログラム委員会が発足し、急ピッチで「茨城学」の構想は具現化されていった。開校以来取り組んできた地域の課題解決や地域活性化に役立つ研究などを、学生や教職員がより連携しながら、「地域の具体的な課題を題材に、学生が地域社会について主体的に学習する講義」が生まれた。ここであらためて、平成27年4月に船出した、学内最大の授業「茨城学」を振り返ってみよう。

地(知)の拠点

「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」は、自治体を中心に地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学等を支援することで、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的としています。

特集
「茨城」を
授業する
って、マジっすか。

[講義ノート]



IBARAKIGAKU

茨城の近代工業化の光と影

工学部教授●伊藤 伸英

茨城の工業化の歴史を語るとき、日立市の歴史が重なる。近代化にともなう発展と経営の光と影、環境とものづくりの光と影の歴史ともいえよう。この街のシンボルとして親しまれ続ける日立鉾山の煙突には、近代化の歩みが直面した問題を克服してきた努力が刻まれている。その歴史から、地域社会の課題解決を考える視野を学びとってほしい。

今、日立鉾山の煙突に問う。 環境とは、ものづくりとは。

日立市は、日立製作所・日立グループの企業城下町として栄えてきました。2013年現在、茨城県の工業生産額は年間10.9兆円、全国10位の工業県ですが、日立市は、明治の近代化以降、そのけん引役を担い続けています。その象徴的な存在が、日立鉾山の煙突です。

創業者の久原房之助が日立鉾山を開業したのは、1905年(明治38年)12月のこと。後発ながら、開業まもなく日本を代表する大銅山へと成長していきます。

銅は人類が初めて利用した金属で、その歴史は6000年に及ぶと考えられ、常に文明の発達に貢献してきました。19世紀に銅の良質な導電性と非磁性性を利用して電気工学産業が開花すると、その使用量は大幅に増加していきます。鉾山の電化と近代的銅精錬技術体系が確立され、国内での銅の生産が急速に増えるなか、1890年には足尾銅山で日本最初の水力発電所が完成。日立鉾山でも、1907年に中里発電所が建設されました。

日立鉾山の発展は、日立の町に発展と繁栄をもたらしました。創業当時の1905年、日立村の人口は2400人。米国などからの輸入品に頼っていた電機機器を、「日本で使う機械は日本人の手で作ろう」と日立鉾山の従業員で

あった小平浪平が日立製作所を立ち上げたのは1910年でした。雇用の増加にともない、その3年後には日立村の人口は25,000人へ急増します。日立製作所はその後、創業30周年記念事業として、茨城県が予定していた設立費用300万円をすべて負担して、本学工学部の前身である多賀高等工業学校の設立にも寄与するのです。

一方で、急速な工業の近代化がもたらしたのは、鉾山問題でした。特に、精錬所から出される排煙(亜硫酸ガス)や排水に含まれる銅イオンによる鉾山は深刻でした。農作物や樹木への被害が広がり、さまざまな対策が講じられるものの、失敗の連続。次第に補償費用が経営を圧迫するようになります。

環境を守るか、経営を守るか——。

久原社長が考案したのは、「噴煙を空高く吹き上げる火山のように空高く高層気流に乗せて拡散させよう」という大煙突構想でした。

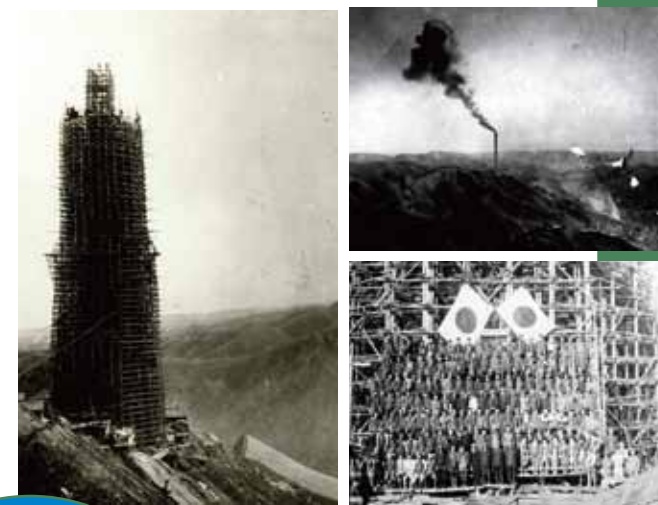
煙突を高くすれば、近隣の煙害は解消する。しかし、排煙の到達範囲は広がり、煙害がより広域に及ぶ可能性がある。その際、当然、その地域への補償金が必要になる怖れも生じる。大煙突建設にかかる多額の費用は、抜本的な解決策として、排煙から有毒物質を取り除く研究に回すべきではないか……。

賛否両論の末、久原社長は大煙突建設を決断。1914年12月、三作山頂(標高328メートル)に高さ150メートルを超える世界一の大煙突が完成しました。稼働を開始すると、鉾山周辺では煙害が激減。気象条件に合わせて制限溶鉾などの対策も取られ、結果、鉾山経営は安定していきました。

春。この季節、桜の名所として、日立は戦前から知られています。その発端は煙害被害に遭った山肌におオシマザクラを、日立市内にはソメイヨシノを植樹したことに始まりました。

環境とものづくり、人びとの暮らしと発展。直面する難しい課題にどう立ち向かうか。大煙突建設の裏側では、見送られた抜本的な煙害の解決法がありました。皆さんなら、どんな決断をされるでしょうか。論議は今に通じる私たちの課題でもあります。(談)

工学部の伊藤伸英教授(写真左)と日立鉾山の煙突。直木賞作家の新田次郎の小説『ある町の高い煙突』のモデルにもなった工都日立のシンボルである。日立鉾山の煙突建設は、当時としては珍しい鉄筋コンクリート製で、工期に9ヶ月、人員は延べ36,840人、総工費30万円(現在で約10億円)をかけて建設された。高さ約155.7メートル、世界一位の大煙突だった。1993年2月19日に大煙突は倒壊し、現在の高さに。2007年、日立鉾山は、経済産業省が認定した近代化産業遺産群のひとつに選定されている。



日立市の歴史と日立鉾山の煙突

- 1889年(明治22年): 町村制施行により、多賀郡日立村発足。
- 1897年: 日本鉄道助川駅(現日立駅)が開業。
- 1905年: 久原房之助、日立鉾山の開発に着手。
- 1908年: 日立鉾山専用電気鉄道が開業
- 1914年(大正3年): 大煙突完成。
- 1928年(昭和3年) 常北電気鉄道(後の日立電鉄)開業。
- 1939年: 多賀高等工業専門学校(本学工学部の前身)創立。多賀郡日立町・助川町が合併し、日立市に。
- 1945年: 日立空襲。
- 1960年: 日立鉾山専用電気鉄道が開業。
- 1981年: 日立銅山、閉鎖。
- 1993年: 大煙突、倒壊。
- 2005年: 日立電鉄線が廃止される。
- 2011年: 東日本大震災。



写真提供: 日鉾記念館、日立市観光協会

特集
「茨城」を
授業する
って、マジっすか。

[茨城学概要]

「茨城学」って、
茨城について学ぶの？
別に茨城に興味ないけど…。



2015年12月25日、全学必修講義「茨城学」の
光景。「日立市の製造業の現状と市の取り組み」と題して、日立市産業経済部商工振興課
の野内さんが壇上に立つ。クリスマスの午
後、学生たちへのメッセージは地域振興だ。



どんなことを教えてる？

これが、噂の 「茨城学」

本学生のひとり、農学部一年生に、「茨城学」の講義
を見学に行くことを伝えたところ、「あの授業は、早めに
来たほうがいいですよ。みんな、席に座っていますから、
遅れて入ってくると、注目的になっちゃいますよ」と言う。

場所は講堂、大階段教室だ。ドアには座席表が貼って
あり、学生たちは慣れた様子でそれぞれの席に向かう。
暖房フル回転で536人収容の空間を暖めている。正面に
はスライドショー用の大きなスクリーンが設置されてい
て、講義というより、なにやら一大イベントの会場に來た
ような気分だ。エプロン姿のスタッフ、後にご紹介する
COCコーディネーターが講義資料と「振り返りシート」を

手渡してくれた。この日の講師である日立市の職員と打
ち合わせをする担当教員の清水恵美子准教授の姿が見
える。

定刻まもなく、学生が壇上に立った。近く、地域の公民
館で開催するイベントの告知で、「白菜フェス」とのこと。
暖冬とはいえ、やはり、お鍋に白菜は欠かせない。年の
瀬押し迫ったクリスマスの午後、食欲をそそるイベント
紹介を皮切りに、年内最後の授業は始まった。

授業は必修、前期・後期それぞれ全15回の構成に
なっている。前期は教育学部と人文学部の新入生、後期
は理学部、工学部、農学部の新入生が対象だ。5学部
の教員、自治体、民間企業から毎回異なる講師が登場し、
各々の分野から地域社会の現状と課題が提示される。
学生たちは、その解決策について、講義を踏まえて課題
レポートとディスカッションに取り組む。本特集の冒頭で
紹介した、伊藤伸英・工学部教授の日立鉾山の煙突を
題材にした「科学技術による地域振興と世界への情報
発信」も、後期に行なわれた「茨城学」の講義のひとつ
だった。

壇上の講師のプレゼンテーションが終わると、学生た

授業の進行は、講義、振り返り、グループディスカ
ッション、質疑応答となっている。テーマによって、活
況の度合いは異なるが、概して学生の地域への意
識は高い。

ちは「振り返りシート」に各々の意見を書き始めた。そし
て、グループごとのディスカッションへ移る。伊藤教授の
提示した課題、「もし、あなたが鉾山の経営者だったら、
『大煙突の建設』『理化学的な処理技術の開発』、どちら
を選択しますか」を例にとると、ある学生は「大煙突建設
を選択する。なぜなら、排煙の問題を素早く確実に軽減
することができるから」と述べ、別の学生は「煙突を建設
しても排出量が減ってないわけだから広範囲の人から
やがてクレームが来る。処理技術の開発こそ日本の工業
発展につながる」というように、みな、自分なりの解決
策を考え始める。伊藤教授の授業では、さらにこの問題
を現代のエネルギー問題につなげ、原子力発電、化石
燃料、再生可能エネルギーそれぞれのあり方を提示し
ながら、学生たちと地域、国の「今」を結び付けていった。

「茨城」というローカルな響きとは対照的に、扱われる
テーマは壮大だ。否、その誤解と錯覚こそ、この講義に
潜む奥深さに違いない。毎回、異なるフィールドから「茨
城」の現実が投げかけられるなか、さて、座学だけでは
従来の授業とあまり変わり映えはしない。「茨城学」の真
髓は、教室の外で始まるのである。



年明け1月19日には、
阿見町の天田町長も
参加してあいさつ。自治
体の期待は予想以上だ。

.....
さらに授業は
つづき

「茨城学」は、 地域の扉

「学生に訊きたいのは、エプロンの効果。声をかけやすい存在になれたかな」と、西田卓司さんがエプロン考案のいきさつを教えてくれる。前職は本屋さん。なるほど、よく似合うはずだ。

「茨城学」の開設にあたり、西田さんと井坂美子さんはCOCコーディネーターとして学生たちのサポートにあたってきた。教員とは異なる立場で学生と接し、学生の主体的な活動を支援するのがその役割だ。

講義中のグループディスカッションのサポートの他、「イバラキカク」と銘打って、毎週水曜日の午後、図書館1階のインフォメーションラウンジを拠点に学生たちが交流できる機会を設けてきた。授業をきっかけに芽生えた学生たちの地域参画の意識を、キャンパスの外へ向けて発信する重要な役割を担っている。西田さんは「座学だけの授業では、地域と関わることには限界がありますから、もっと課外での活動があったほうがいいのではと思ったわけです」と語る。

「地域の素敵な大人を紹介したい」と、今年度は数回、ゲストトークなどを開催した。読み聞かせの活動をしている学生からは「同じ活動をしている大人の話が聞きたい」、「男女共同参画について学んだが、ロールモデルとして活躍する人に出会ってみたい」と言う学生もいる。「茶道をやりたいけれど、地域でお茶会をしているところはないか」など要望はいろいろだが、「みな、学外への意識を持って訪ねてくるんです」と井坂さん。後期からは、茨城新聞社の協力で「まわしよみ新聞」を行ない、地域の「今」に目を向ける活動を手助けする。

他学部の学生と、
サークル以外で交流できるって
結構おもしろいかも…。

特集
「茨城」を
授業する
2
って、マジっすか。

[COC×学生]



講義を受けて、地域との関わりを模索する学生たち。真剣に、楽しく、柔軟な視点で地域を見つめる。



西田卓司さん
社会連携センターCOCコーディネーター
前職は、新潟大学近くの書店経営。悩める学生たちの姿を見ながら、若者たちにもっと自信を取り戻す場を作りたいと願う。「地域というフロンティアに飛び出していくのは、学生にとってはチャレンジ。そこに素敵な人がいたり、ボランティアなどの使命感だったり、きっかけはそれぞれでも、多様な価値観のある世界でチャレンジが生まれ、いつの間にか成長している自分がある。そんな入口を創ることが、私のミッションだと思っています」。



井坂美子さん
社会連携センターCOCコーディネーター
都内の出版社での勤務を経て茨城へ。地域活動のコーディネーターや女性医師のキャリア支援などに従事してきた。今後、「学生たちが集える場を確立していきたいな」と思っています。積極的な学生はアピールの術を心得ていると思うのですが、ちょっと大人しい、上手にチャンスをとらえられない学生たちもいるので、地域への扉となるこのプラットフォームにたどり着き、地域と関わるきっかけが作れるような環境を整えてあげたいですね」。



「茨城学」は、 行動する科学

COCコーディネーターたちの励みは、学生たちみずからの活動の広がりである。この一年に芽生えたいくつかのプロジェクト活動について、当事者である学生ふたり話を聞いた。

本題に入る前に、少し、学生から見た「茨城学」についてたずねてみた。

教育学部の渋谷直樹さん。八千代町の出身だ。「入学早々、大々的に『茨城学が始まります』と言われていて、県内の出身ですからね、何でいまさらという思いはありましたよ。友だちやSNSでも、『必修じゃなくてもいいんじゃないの』という声は結構耳にしました。でも、自分の住んでいる地域のことくらいは知らないとなつていう印象でしたね」――。

一方、人文学部で学ぶ山梨県出身の赤池夏実さんは「第一印象は、『いいんじゃないの』でしたね」とスムーズ



赤池夏実さん (山梨県笛吹市出身)
人文学部人文コミュニケーション学科1年
「一年生は何事も初めてですから、土地を渡されて、そこから何か耕して貰って言われた感じでしたね。いつも試行錯誤でしたが、地域の人とつながって、普通に授業に出て、サークル活動して、毎日過ぎていっただけではできない経験がたくさんできて、気がつけば、豊になっていった気がします」。



渋谷直樹さん (結城郡八千代町出身)
教育学部数学選修1年
「一期生というかたちで、新しいことにチャレンジできたのは、大きかったなという気がします。県外生にとっては、第二の地元。こういうプロジェクトをしながら、2つの地元を比較できたりするから、面白いだろうなって思いますね。今までの18年間とは全然違うものが見えてくるようになって」。

.....
さらに授業は
つづき

地域に繋がるって…?

に必修を受け入れた。「私の地元も、わりとマイナーなイメージですから、授業を受けるにつれて、『山梨学っていうのもほしいな』と思いました」とにっこり。帰省の際には納豆以外の茨城の魅力が話題になるという。

さて、「茨城学」の受講生たち。地域への扉をどう開いたのか…。

渋谷:わかりやすいテーマからと思いました。日常生活に一番密接なのは「食」がなって。社会連携センターが行なっている「学生地域参画プロジェクト」という事業の紹介を受けて、「食プロジェクト」を立ち上げたのはゴールデンウィーク前でした。最初に集まった時は、みんな、初対面!って感じで(笑)。僕なんか、『うわ、県外の人もあるよ』って、新鮮な感じがしましたね。

赤池:プロジェクトとして活動する道筋を立てたのは、6月上旬でした。7月初旬にプロジェクトの採択を受けて、最初にイベントを行なったのは夏休み直前でしたね。

渋谷:夏野菜を取り上げて、「夏カレーフェス」をやったんです。JA水戸の協力で野菜を提供していただいたりして。

赤池:2回目は石岡の「栗」、3回目は常陸太田と常陸大宮の「常陸秋そば」でした。

渋谷:12月に僕の地元の八千代町の「白菜」を使って、最後に1月にひたちなかの「干し芋」で締めくくりとなります。



1月30日、大雪の中で開催された「干し芋フェス」。「食プロジェクト」の集大成は、豊作だった。

特集 「茨城」を授業する 2

【プロジェクト】

茨城について学んだら、自分の地元が気になり出した。社会が、ちょっと見えてきた。

楽しく茨城の食の魅力を味わいながら、少しでも地域に目を向けてみようという取り組みです。

赤池:本格的に動いているメンバーは6人くらい。当日手伝ってくれるスタッフが2、3人いて、あとは広報として美術選修の学生がポスターとかチラシとかを描いてくれるんです。

渋谷:学生が話すだけでなく、地域の方々の講演も毎回開いてるんです。その食材の生産農家さんやボランティア活動に積極的に尽力されている方、NPOをやっている方など、実際に地域に出て交流してお話を聞いた方で、「他の学生にもこの人の話、聞いて欲しいな」という方にお声がけしてきたんです。

プロジェクトを通じて、学生たちは何を学んだらう。「地元には、地域と密接に関わる場が全くなって」と言う赤池さんは、「参加者にはなれても、自分から行動する機会がなくて。このプロジェクトを立ち上げられたことは、自分の主体性というか、大学に入ってから自分自身が成長できた新しい経験になったと思っています」とみずからの変化を語る。

地元の人と知り合い、言葉をかけあい、交流が生まれたこの一年。地域の実践的な課題解決に関与し始めたふたりが、これからの学生生活にどう「茨城学」を結実していくのか、答えは未知数だ。

茨城あつての大学教育!

「茨城学」は、進化する授業

全学共通の必修科目として、1年生全員が同じ空間での授業を共有するという初の試みは、茨大生の体験として、これまでになかった共通項になる。そこで議論し、熟成されたアカデミックなビジョンを、学生たちは共有する。そんな「茨大」ならではのアイデンティティを、良しとする者、異を唱える者、賛否があるのは当然だ。学生たちの多くは、「茨城」自体に興味があって、入学してきた

プロジェクト発表だ!



僕らもひと言!

工学部・都市システム工学科 浅岡大輝さん

(茨城学では)一つのテーマを先生方から話してもらったりしていると、いろいろなところにリンクしてくるんですね。そういう発見ができるのが面白いと思いますね。

工学部・知能システム工学科 伊藤拓未さん

静岡の出身です。今まで地域のことをあんまり考えてなかったんで、地域の活性化を考える機会になりましたね。自分の専攻分野につなげていくいい機会にもなりました。

理学部 田原菜々海さん

茨城に住んでいるけど、あまり地元のこと知らないなと思っていて。だから、「楽しそうだな」と期待感がありました。地元企業についても知る機会が少なかったので、すごくよかったです。

農学部 山岸直夏さん

地元はどう貢献できるのか、どうしたらもっと発展していけるか、考えさせられました。どうしたらもっと住みやすくなるのか。地域貢献ということも考えるいい機会をいただきました。

わけではない。必修への戸惑いもあるだろう。しかし、どの分野、領域であれ、地域や社会との関わりは避けられまい。そして、なにより、地域の人びとは、学生との関わりを求めている。「食プロジェクト」の渋谷さんや赤池さんなど、学外での活動に踏み出した学生たちは、それを実感し、初めて「茨城学」の意味するところを感じるのではないだろうか。自治体や民間企業が「茨城学」への協力を惜しまないのも、その証であろう。

初年度ということもあり、学部も教員も手探りだったなかで、授業やディスカッションに取り組む学生の姿勢も、与えられた課題によって盛り上がりには差があるようだ。自治体や地域の問題を「お国自慢」のPRではなく、現場で真剣に取り組む当事者たちの思いとして学生たちが共有できるとき、彼・彼女たちは本領を発揮する。学生が当事者意識を持って参加できる課題を提供できるか否か——、授業の成功の鍵は、そのあたりにありそうだ。「いい課題が出たときは、時間が足りなくなるくらい手が挙がるんですよ」と清水准教授は言う。やはり、積極的に手が挙がる授業は、見ていて気持ちいい。教員や講師たちの腕の見せ所は、むしろ、これからだ。

1月29日、今年度最後の「茨城学」は、学生たちのプレゼンテーションで締めくくられた。みずからの取り組みについて発表した学生たちを見ながら、清水准教授は「かれらは、こう言うんですよ、『場を与えてくれて、ありがとう』と。試験期間だというのに、あれだけの準備をして、発表するのですから」とこの一年の手ごたえを感じる。

翌30日、水戸は雪景色。大学近くの堀公民館では、今年度最後の「食プロジェクト」イベントとなる「干し芋フェス」が開催された。学生や地域住民などおよそ60名の参加者で会場は満杯。地元のシンガーソングライターのライブに続く、JA水戸の代表理事やひたちなか市の干し芋農家の経営者、「カタリバ」と呼ばれる対話型キャリア学習プログラムの県内準備室の代表などの講演を熱心に聞き入っていた。同時に、会を束ねる学生たちの結束と、干し芋を囲んでの交流の姿が温かく、印象的だった。

その光景と講堂での講義が重なるとき、「茨城学」のかたちが見えてくる。ふと気がつくと、大学正門前の梅は満開だ。春の到来とともに、ことしも新しい学生たちに「茨城学」から熱い刺激を受けてもらいたい。

特集

「茨城」を
授業する

って、マジっすか

3

[ふりかえり]

一年の取り組みを振り返る

初めての試みに学ぶことは多い。
講師も、学生も、さまざま試行錯誤を繰り返した一年。
期待があった。賛否もあった。そして、感動も。
それぞれの立場から「茨城学」を振り返ってみた。



「阿見町×茨城大学」の 地域ブランドを創りたいですね。

阿見町長●天田 富司男

阿見町が茨城大学と連携協定を結んだのは、平成18年。この10年間、町、農業をする人、そして大学という3つがつながりを持ち、三村学長をはじめ、多くの先生方に連携事業に加わっていただき、その関係を深めることに努めてきました。昨年は、卒業生を2名採用、農業振興課に配属しました。大学との窓口として、さらなるコミュニケーションの加速を図っています。「茨城学」では、その2名を講師として派遣させていただきました。400名もの後輩たちが見守るなか、阿見町の農業振興と食育事業について、有意義なプレゼンテーションができたと思っています。

阿見町では地域のふれあいイベントとして、「まい・あみ・まつり」を開催しており、実行委員には多くの茨大生が参加しています。祭りでは町特産の大玉スイカを切り分けて振舞っていますが、核家族、少子化の時代で、スイカを丸々ひとつ切り分けて食べる経験をしたことのない学生さんもいます。一つのスイカを通じて、町や地域、仲間を感じる、阿見ならではの新鮮な体験でもあります。

阿見を舞台に「産・学・官」の連携を深めることで、茨城の個性と地域の特徴を活かした「阿見町×茨城大学」発信の阿見ブランドを世界に発信できれば素敵ですね。「茨城学」での登壇には、そんな自治体の思いがこもっていることを心に留めていただければと願っています。(談)



ローカルizmあつての グローバルizm

木内酒造合資会社 取締役●木内 敏之

ネット社会になって、居ながらにして瞬時に情報が集まる時代。調べることは上手になったのですが、考えて行動することは楽しくない気がしますね。学生には、個性のない画一化した考えではなく、グローバルな視点で物事と向き合える経験を積んでほしいです。家にもってインターネットをやっている、国際的な視野は広がらねえよ。世の中に出て、国内、海外、自分の足で歩いたほうがいい。外国人と積極的にコミュニケーションしたほうがいい。とにかく活動の場を広げることです。

われわれが20年前にクラフトビールの製造に新規参入したときには、日本酒メーカーの視点ではなく、世界のビール工場が何をやっているのかを基準に考えました。田舎でのニッチなビジネスではありますが、おもしろいのは、海外に進出すればするほど、田舎や地方を意識することになるんです。グローバルに仕事をするのに、世界を語っても物は売れません。ローカルの良さ、田舎の良さを表現しなければ、世界は見えてくれません。ローカルizmあつてのグローバルizmなんです。

これからの時代、地域のことも理解しながら、物事の本質を語る学生たちが求められています。流行りのビジネス、ただ売れるだけの商売ではなく、地域に根差したものづくりや職人のスキル、そこにあるべき本質を見極める能力を身につけてもらいたい。茨城学は、そういう本質を教える場ではないでしょうか。(談)



「茨城」を通じて、 自らの地元を相対化する視野を

社会連携センター 准教授●清水 恵美子

昨年春に始まった「茨城学」は、「全学部・必修科目」ということで、当初、1年生の学生たちにはちょっと戸惑いもあったようです。前期終業後の授業アンケートでも、「選択科目でいいのではないか」という意見が少なからず挙がりました。そもそも、学生の多くは「茨城」を学びたくて、入学したわけではありません。県外から来ている学生は6割にあたりますが、4年後、茨城を去っていく学生もたくさんいます。県内出身の学生でも、茨城が大好きという学生ばかりではありません。

なぜ、茨城学は「必修」なのか——。「茨城」はあくまで素材であって、「地域」を知り、地域について考えることが授業の主眼です。大学の位置する茨城が抱えている課題は、学生たちそれぞれが生まれ育った地域の課題でもあります。後期授業最終日に発表をした学生が話していたように、「茨城のことを知れば知るほど、自分の地元が気になっていく」、そういうみずからの地元を茨城学を通じて相対化していく視点こそ、この授業から学生たちに獲得してほしい資産です。

「数学専攻ですが、これから4年間で学ぶこと、この茨城学が自分の中でうまくつながらない」という学生の声もありました。どんな専門であれ、学生たちのほとんどは、4年後に社会へ出ていくことになります。そのとき、大学で学んだことを活かす先には、地域があります。北海道であろうと、東京であろうと、カリフォルニア

アであろうと、そこには地域の共同体があるわけですから。家族や職場のある地域を知り、そこに住む人々と交わり、その地域の文化を理解して初めて、自分の専門性を活かした仕事ができることとなります。大学では専門性や基礎研究力を向上させることはできますが、社会力やコミュニケーション・スキル、社会での問題解決能力の育成には、地域と連携的に学ぶ必要があります。それが、茨城学です。



全学部必修ですから、1年生の学生たちにとって、「茨城学」は共通言語です。良くも悪くも、SNSを見ると賛否両論吹き荒れて、授業の内容によってはかなり白熱した議論になっていたようです。COCコーディネーターたちの学生サポート「イバラキカク」などもあって、学生地域参画プロジェクトなども生まれました。学部を越えて、学年を越えて、ゼミでもサークルでもない新しい形態の集いが授業の副産物となって生まれてきたことも、貴重な財産だと思っています。

学生たちには、さらに多様な価値観を身につけるためにも、2年次以降、地域志向教育プログラムなど、それぞれのキャンパスから積極的に学外へ飛び出していってほしいと考えています。同時に、教員であるわれわれも、新しい学生たちを迎えるにあたり、さらに質の高い授業を展開するため、学部と足並みを揃え、自治体や民間企業との連携を密にしながら、この一年の反省、改善事項を踏まえて、臨んでいきたいです。(談)

1 PROFESSOR INTERVIEW

「元祖・理系女子ですね!」など呼んではいけない。現役の理系女子だ。遺伝子に恋し、DNAの行く末を憂いながら、海を渡り、叶うか叶わぬか、胸を痛めながらもついに射止めたDNA損傷を可視化するモニタリング技術。「研究とは恋心なのですね!」、いやいや、茨大でのDNAとの恋物語は、まだ始まったばかりなのである。

PROFESSOR'S KEYWORD

γ-H2AX

(ガンマ・エイチ・ツー・エー・エックス)
H2AXというたんぱく質がリン酸化したもので、DNA損傷の周りに特異的に生じるため、染色すれば高感度DNA損傷マーカーの役割を果たす。この手法は、1998年に米国のW・ボナー博士が発表した。



細胞レベルから人を助けたい、それが私のDNA



ドット状に光っている部分がDNAの傷の部分(写真下)。「放射線の量にあわせて、DNA損傷の数が増えていくのを見たときは、衝撃でした。でも、時間が経つとその傷が修復されて消えていくんです。生命って、凄いなと思いましたね」(中村准教授)。福島原発事故では、被ばく家畜のDNA損傷レベルを解析し、線量評価を行なうための情報収集に貢献。中村准教授は日本放射線影響学会で平成26年度日本放射線影響学会奨励賞を受賞している。

高校生くらいか、科学だったり、歴史だったり、何かに「憧れる」ってあるじゃないですか。私が憧れたのは、「遺伝子」でした。身内の一人が小児糖尿病(1型糖尿病)を発症して、「一生、インスリンを打たなければならないんだよ」と聞いた時、なぜか納得がいかなかったんです。これだけ薬がある時代に、どうして飲み薬で治せないんだろう、と。その後、小児糖尿病は一種の遺伝疾患と知りまして、遺伝病の原因やその治療に関わりたかったのが、今の研究の発端でした。

現在、DNA損傷を可視化する技術の応用研究を行なっています。日々私たちのDNAには太陽からの紫外線や宇宙からの放射線を受けて、またはたばこの煙やウイルス感染などで、さまざまな傷が発生しています。細胞はそれを修復する機能を備えているのですが、一定の損傷を超えると、傷は修復されず、老化や炎症、癌などを発症する原因になるんです。

もともと、DNA損傷を修復する機構の研究をしていたのですが、米国の研究機関に留学したとき、傷そのものに着目する研究にシフトしました。DNAの傷は目では認識できませんが、傷のまわりに生じるリン酸化したH2AXというたんぱく質を染色すると、観察ができます。リン酸化H2AX、「γ-H2AX」と呼んでいます。このモニタリングシステムを利用することで、どの程度の

DNA損傷が人の体に何を引き起こすのか、傷を解析しながら予測するわけです。

留学先で最初に取り組んだことは、DNA損傷がDNAのどこにあるのかをはっきりさせるため、タンパク質であるγ-H2AXとDNA構造を同時に染色するという新しい手法の開発でした。

実はこの実験、ふたつの相反することを同時に行わなくてはいけないんですよ。DNA構造を染色しようとするタンパク質は邪魔なのでH2AXを壊さなくてはならない。逆に、γ-H2AXを染色しようすると条件がマイルドすぎてDNA構造は鮮明には見えない。そのせめぎ合いを1年ほど続けて、ある条件でDNA構造も損傷も鮮明に解析できた瞬間は、感動的でした。蛍光染色の画像って、きれいなんですよ。

茨城大学に来て、この春から4年目。初めて研究室を持って、あつという間の3年間でした。細胞生物学の授業を受け持ちながら、自分の研究を学生たちと共有していく楽しさの一方で、これまでの実験や研究をどう継続していくか。今年は言い訳せずに(笑)、研究も進めていきたいですね。

私の研究は、出発点が病気でしたので、やはり、興味は「人」です。何かしら、人に返さなければならぬという気持ちで、常に社会的な意義を見据えながら研究に励みたいですね。(談)

理学部 准教授
中村 麻子
Asako NAKAMURA

プロフィール ● 京都大学放射線生物研究センター(2002年4月-04年2月)、National Institutes of Health(USA・04年3月-11年3月)、大阪医科大学解剖学教室(11年4月-13年3月)を経て、2013年4月より茨城大学理学部准教授。博士(薬学・広島大学大学院医学系研究科分子薬学専攻)。研究分野は放射線生物学、担当授業は細胞生物学(専門)、生物学基礎実験(専門)、自然と人間(教養)など。

教育学部 准教授
小林 祐紀
Yuki KOBAYASHI

プロフィール●金沢大学大学院教育学研究科修了後、金沢市内公立小中学校に勤務。2015年4月より現職。専門は、教育学、情報教育、ICTを活用した教育実践研究。教師、管理職や指導主事、教師を夢見る学生、研究者たちが学び合う茨城県教育学研究会を主宰。担当授業は、ICT演習、社会と文化・II、教育の方法と技術など。

関わり合いの中で、人は学び、成長する

金沢大学で学び、そのまま金沢に残って小学校の教員を約10年務めて、昨年(2015年)春から茨城にきています。

金沢で教職に就いて最初に感じたのは、学校現場が大学教育とかなり乖離していることでした。双方をつなぐような役割を担いたいと思って、教員をしながら、学校現場のことを論文にまとめて発表したりして、今に至っています。

教師の仕事は、「教えること」と思われがちですが、本当は「支えること」だと思うんですね。できるだけ、子供たちに話をさせる、考えさせる、そういう機会を増やして、意見を述べやすくすることを心がけてきました。今、大学で同じことを取り入れています。振り返ってみると、小学校教員時代に、もっとできたことがあったなと思いますね。

後期の授業、ICT演習の第一フェーズで、グループごとに大学案内を制作する課題を与えたのですが、実際に作ったパンフレットを小学生に評価させたんです。「これ、コンセプトがわからない」「レイアウトがまいち」と、平気で言うものですから、学生たちにはたまったものではなかったでしょうが、そういうやりとりを交わしながら、小学生の視点でも表現力を養っても

らいたかったんです。そのときつくづく思ったのは、金沢でも教室に大学生を連れて来ればよかったなということでしたね。そんな思いが、この春から始まる「教職大学院」の授業をつくっていく上で活かされている気がします。

昨今、学校や地域でリーダーシップを担う人材が求められているなかで、教育現場の教師たちに教育者としての力量をもっと高めてもらいたいと大学も自治体も感じています。

教員自身も同様で、最先端の教育や教育指導を学びたいと考えているのですが、遠距離の大学まで通うには多忙すぎて、なかなか一歩を踏み出せない現状があります。茨城大学なら、多くの方が学びに来てくれるのではないかなと思っていました。実際、今年度はたくさんの方が受験してくれました。学びたいという意欲ある教員は、やはり、たくさんいるんです。

その志を汲み取る受け皿の責任と重要性を感じながら準備を進めています。ここで学校運営や子どもの研究を積み、より高い資質を持って現場に戻るとき、子どもたちと教師が生き生きと関われる学校作りができると確信しています。(談)



ICT (Information and Communication Technology) 演習の風景。後期のこの授業は3つのフェーズに分かれ、グループで大学紹介のパンフレットを作成、グループ・プレゼンテーション、学生個々に動画教材を創るという構成になっている。「ICT教育は、特に「C」が重要です。小学校の教員時代から『人の成長は、人との関わり合いの中から』と伝えてきて、今、大学生にも同じことを伝えていきます。」(小林准教授)



PROFESSOR'S KEYWORD

教職大学院

平成28年度に開設される本学大学院教育学研究科「教育実践高度化専攻」は「教職大学院」と呼ばれる専門職大学院。学校現場の経験が豊富な教員の協働的指導により、地域や学校における指導的役割を果たし得る実践力・応用力を養い、近年複雑・多様化している学校教育の課題に対応できるスクールリーダーの養成を目指す。



2 PROFESSOR INTERVIEW

動画編集を終えた学生たちが、互いの作品についてグループで語り合う。

とかく、モニターに向かって黙々と作業しがちなプロジェクトに対話を組み込み、個々の成長をクラス全体の成果へと押し上げていく。

ICT教育の知見と小学校教員の経験を活かして、この春開設する教職大学院の授業などを通じて、茨城の教育界に一石を投じる。



めえ〜



時間だよ

our ゼミっ!

わたしたちの研究室を紹介します



工学部 都市システム工学科
村上 哲 准教授

ががが



農学部 生物生産科学科
安江 健 教授



人文学部
人文コミュニケーション学科
谷口 基 教授

農学部 安江ゼミ



開設22年目になる私たちの安江ゼミでは、ヤギの飼育を通して、農用家畜の行動管理を研究しています。近年では、除草剤を使わないエコな除草方法として、ソーラー発電施設の除草や、大地の放射性物質の除染などでも活躍しています。

ヤギたちを効率よく管理するためには、ヤギの習性を理解しなければなりません。例えば、エコな除草方法として太陽光発電の現場に放し飼いにするのは簡単かもしれません。でも、ヤギは高いところを好む習性がありますから、うっかりするとソーラーパネルの上に乗って発電を妨げたり、パネルを傷つけたりしたら、

生き物の研究と実習、ヤギとともに

たいへんです。かといって、電気柵などを設けては大きなストレスになりますから、生産性が悪くなります。ゼミ生の仲間には、施設の中にソーラーパネルよりも居心地のいい休憩場所を作ることでパネルへの被害を減らせないかと考え、高さや傾斜などヤギの理想郷を模索している者もいます。

研究テーマは365日、1日2回欠かさず世話をする生き物です。些細な変化にも敏感でなければなりません。心配りと適切な処置、行動力が求められるところです。人間本意ではなく、動物の立場に立てる飼育者を目指して、日々、私たちの研究と観察は続きます。



生きた動物を扱う上で、毎日の世話は欠かせない。餌やり当番などで行動をもとにすることで、自然とゼミ生同士の交流も深まる。「動物は弱く、ちょっとしたことで死んでしまうため気が抜けない」と話す学生たちは、去年2頭のヤギを見送った。苦しい思い出もまた、明日の学問と研究に生かされる。

工学部 村上ゼミ

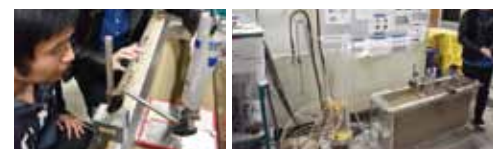


先輩・後輩のつながりが、わがゼミの伝統

「ジバケン」こと村上ゼミでは、液状化の被害を最小限に抑え、予防するための方策を研究しています。先の東日本大震災で、浦安市やひたちなか市、潮来市などが襲われた土地の液状化現象。現在、液状化による土地の地盤沈下を防ぐためには「格子状地盤改良工法」と「地下水位低下工法」という2種類の工法が実用化されていますが、どちらも極めて高額なため、ごく一部の被災地でしか施工されていません。村上ゼミでは、ひたちなか市と連携し、従来の工法よりも低コストな液状化対策工法をわれわれゼミ生それぞれが考案し、実証実験を重ねています。

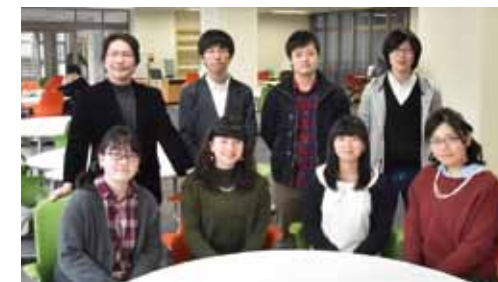
このゼミでの研究・実験のやりがいは、事前に立てた仮説が予想通り実験結果で得られた時ですね。もちろん、結果は成功ばかりではありませんから、予想外の事象が発生し、それまでの仮説が白紙に戻ることもままあります。そんな時、そこで諦めてしまっただけでは解決は見えてきません。「思考を続ける。考えを止めるな」というのが、われらジバケンの合言葉です。

論文作成は、孤独ですよ(笑)。仮説を立て、黙々と実験しそれを証明する。でも、決して一人ではできない作業です。そんな時、陰に陽に助けてくれるのが、先輩たちです。縦のつながり、後輩の面倒を見るのがジバケンDNA。ゼミ開講以来の伝統です。ここでの縦・横のつながりで積んだ実績と経験は、社会に出て生きる、一生の財産になっていくことでしょう。



アクリルの土槽にひたちなか市開門地区の地盤を再現し、地震を発生させ、新しい工法を施工前後で地盤沈下の度合いを測る。開門地区は液状化層が厚く、現在のところ有効な地盤沈下の防止法が少ない。地盤に補強シートを敷く新工法の効果が実証できれば、低コストで液状化の予防ができる。
注) ジバケンとは「防災・環境地盤工学研究室」、略して「地盤研」のこと。

人文学部 谷口ゼミ



文学に綴られる一行一行を深く考察する

文芸思想コースの専門演習のゼミで、明治時代から現代までの日本近代文学が研究の対象になっています。4年生が7人、3年生が6人で新年度の春を迎えます。特徴は、何と言っても、読書好きの集まりですね。純文学のみならず、エンタテインメント、マンガまで多彩な読書経験、豊富な読書量を持っている仲間が集まっています。

「君たち、何をやってみたいの?」と谷口先生が口火を切ります。ただの好みではなく、私たちが取り組みたい課題、作家であったり、作品であったり、何度もプレゼンして、みんなで議論し、全員の同意を得ながら、発展的な議論に結びつけていくかたちで、ゼミは進行していきます。

短編を読んで自分たちの考えを述べるのですが、意見は「感想」ではなく、「こう書いてある。だから、こうでないか」と根拠に基づいて考え、論理的に分析をしていきます。作家の生涯、歴史背景、世態、風俗など、さまざまな方向から文学作品を論じて、その根拠、意味付けをしていきます。

常に頭を働かせていないと置いていかれてしまうくらい、よく考えさせられます。読むことを通じて、書くことも磨かれますし、話をする能力も身に付きます。読んで考えることでインプットしたものをアウトプットすることにつながるのですね。視野が広がるいい経験を積み重ねています。



大学図書館との協働で今年1月に開催された「ピリオバトル」では谷口教授の講評を含めて、ゼミのメンバーが参加、司会進行も行なっています。読書好きが集まり、お褒めの本や好きな作家について、わずか5分間でその読みどころを闊達な口調で紹介していきます。本の感動をストレートにぶつけるところが、実に爽快です。



どこまでも伸びていきそうなポーズ。何にでもなりそうなかたちに未来を見る



一瞬

[ひととき]

No.01

「あぐむ」
秋山 拓摩 作
平成22年度卒業作品
水戸キャンパス教育学部B棟

試験期間を迎える水戸キャンパスのひととき。
学生たちは、図書館で、学部棟で、研究室で、試験に備える。
頑張れ、学生たち。キャンパスの片隅から、そっと見守っているよ。

小山 彰一さん Shouichi Koyama

コーヒー焙煎士 1988年人文学部人文学科卒

学生時代の面白さは、未知数。それを見つけたかった。

京都大学人文科学研究所の助手であった批評家浅田彰が26歳で『構造と力』を出版したのは、1983年。プレモダン、デリダやフーコー、ドゥルーズらのフランス現代思想（構造主義、ポスト構造主義）を解説するという難解なテーマを扱うにも関わらず、15万部を超すベストセラーとなり、「浅田彰現象（AA現象）」を巻き起こした。小山彰一さん、18歳。茨大での学生生活はその翌年から始まる。

心理学とか哲学が好きだったので、そういう勉強をやりたいと思って大学に入ったんですが、「哲学じゃ、食えないよ。教師になるしかないよ」と言われて。自分もなんとなく、そうだろうなと思うながら、過ごしていましたね。

2年のとき、学内発行のミニコミ紙の編集に誘われて。「ライターか。そういう憧れがあってもいいじゃないか」と始めたんですね。「ミス茨大」に近いような企画を立ち上げたりして、思い出すと恥ずかしくなっちゃいますが（笑）、一眼レフが好きな仲間が撮って、インタビューは僕がやって。文字はワープロ。部室でプリントアウトしたものを切り貼りして、印刷所へ持って行くというね、当時は手間暇でしたよ。

その仲間のひとりから、「演劇、やってみない？」と誘われたのが、転機になりましてね。3年生のとき。現代哲学の構造主義が自分のテーマだったのですが、なんとなく演劇につながるころがあって、そういう理解の仕方って、ありだなと思ったんですね。

面白かったですよ、演劇は。お客さんの反応ですね。ミニコミ紙を作っているだけでも、知り合いの反応が嬉しいのですが、演劇はダイレクトでしょ。同じ空間じゃないですか。ただ人の前で喋ると言うのとは違うじゃないですか。異常なこととか、極端なことは人前ではしないでしょ。舞台はどんなことが起こるかかわからない。日常生活ではありえない設定もありでしょ。だから、舞台へのリアクションが凄く面白かったですね。

1980年代後半から1990年代初頭にかけて、日本はバブル時代を迎える。東京都内の土地価格で「アメリカ全土が買える」といわれるくらい土地価格は高騰し、1989年（平成元年）の大納会では、日経平均株価は38,957円44銭の史上最高値を記録した。就職は売り手市場。各企業では新卒者募集を拡大。学生サークルのイベントに協賛を出す、内定した学生が他社と連絡できないように研修

等と称して海外旅行へ連れ出す、内定を辞退した学生に人事担当者が暴行する「事件」が起こるなど、学生の獲得競争は熾烈を極めていた。

ちょうどバブルの時代だったので、みんな、ちょっと甘えているというか、平和で呑気な時代だったなと思いますね。就職なんて、しようと思えばいつでもできるって思っていましたからね。だから、就職に有利な勉強なんて、考えませんでした。

実家は下館、今の筑西市、稲荷町です。祖父と父とで魚屋を営んでいて、毎朝始発で築地まで仕入れに行っていました。築地の新鮮な魚でしょ。ちょっとした寿司屋さんとか小料理屋さんが常連で、評判はいい魚屋でしたね。

親には教員試験を受けると言いながら、ぜんぜん準備してなくて。代わりに劇団を3つほど受けたんです。そしたら、全部合格して、「やっぱ、そっちに進むしかない」と決心して、東京へ出ました。

9年いたかな。所属した劇団はどんどん話題になって大きくなっていて、テレビとかCMとか、どんどん話が来て。その後、体制が変わるときがあって、藤木直人さんとか生瀬勝久さんのいる俳優のプロモーションをする事務所へ誘われて、2001年まで役者として仕事をしていました。下館に戻って、「役者、やりました」って言っても、みんな「えっ?!」という感じで、なかなか理解してもらえなくて、ちょっと大変でしたね（笑）。

あるとき、母から留守電が入っていて。泣き声だけの留守電。父が癌だと。それを聞いたときに、あんなに何も言わずに好きにさせてくれた父の姿が浮かんで、とりあえず、すぐに（下館に）戻ろうと。悩みましたよ。戻ってからも、事務所からはオーディションの話など「そっちにいてもやれるでしょ」って何度も言ってくれたのですが、世話になった人たちに、本当にすまないと思いながらも、「もうやらない」と決めました。

でも、こっちで仕事を探しても、なかなか東京のように仕事がない。ちょっとびっくりするくらいでしたね。

1960年代、喫茶店は個人経営の店を主流に、地方都市に広がりを見せていった。ジャズ喫茶、歌声喫茶など多数の業態の店が誕生するなか、70年代に珈琲は多くの人々に浸透していく。珈琲専門店も数多く登場し、近代、知識人や文学、美術などさまざまな分野の芸術家の集ま





プロフィール●1965年12月下館市(現・筑西市)生まれ。下館第一高等学校を経て茨城大学人文学部人文学科へ。1988年卒業後、劇団「遊○機械/全自動シアター」、俳優プロダクション「リコモーション」などに所属し、舞台、ドラマ、CM、ナレーションなどで幅広く活躍。父親の病気を機に実家に戻り、都内の焙煎所などでローストの修行にはげみ、2006年12月筑西市にて「太陽と月の珈琲」を開店、自家焙煎珈琲豆の販売を始める。2011年つくば市下原に移転し、現在に至る。2014年にはSCAJ(日本スペシャルティコーヒー協会)主催のローストマスターズチャンピオンシップで優勝。昨年の同大会でも準優勝を果たす。「太陽と月の珈琲」(つくば市下原89-1)の営業時間は12時から18時。定休日は月曜日と第一火曜日。

太陽、月、あるいは宇宙を感じながら、一杯の珈琲を。

る場として、喫茶店は大衆文化の広がり大きな役割を果たしてきた。家庭への珈琲の普及と立ち飲みチェーン店の登場で、1980年代初頭に15万店を数えた喫茶店は徐々に消え、2006年の統計では8万1千店まで半減した。

役者の頃、珈琲がすごく好きで、しょっちゅう喫茶店に行っていました。焙煎を教えてくださいと都内にあって、焙煎のセミナーとかも聞きに行ったりしたんですよ。「もうちょっと、ちゃんと習ってみようか」と、あちこち探して焙煎を教わったりしながら勉強して、東京まで通ってたんです。3、4年準備して計画を立てて、下館で店を始めたんですよ。

開店して5年、そしたら、震災です。

すごいショックを受けました。何が起こるか分からない。ずっと同じなんて、あり得ないんだなって。やらないで終わってしまうのであれば、今やらないとダメだと思ったんです。それで自分が長年考えていた店をやろうと。ネットで調べてこの場所(つくば市)を見つけて、廃虚みたいな佇まいだったんですが、田園に囲まれたこの風景に惹かれて。いろんな人がちょっと落ち着いて美味しい珈琲を飲みたいなって思える店がいいと思って、「旅人」がほっと一息つけるお店をイメージしました。そう、ちょうどね、農家の方があぜ道に座ってお茶を一杯飲んでいるのと同じ気持ち、そういうのが

いいなって。

4年前から焙煎の大会が発足されて、最初から参加しています。団体戦で昨年は準優勝、一昨年は優勝しました。実は、焙煎用の公式の機械があるんですよ。大会当日には何日か泊まり込んで、その機械で焙煎するんですが、違うんですよ、味がぜんぜん。珈琲じゃないみたい。昔から自分が珈琲だと思って飲んでたものとまったく違う味。うわ、まだまだ全然先があるんだと思って、ショックを受けましたね。世界大会にも使われる焙煎機で、オランダ製。お値段も、国内産とはぜんぜん違って(笑)。美術品のように美しいんですよ。え? まあ、そうですね、ついに申し込みました(笑)。届くのは、この春です。

小山さんの店は、今年開店して10年を迎える。俳優生活に終止符を打つとき、「魚屋の奥さんになってもいいよ」と、小山さんのもとに嫁いだ垂希子夫人とともに、一からの再出発だった。「永かった」と振り返りながらも、人の縁とつながりを信じながら、乗り越えてきた。「こんな自分に厳しい人は、見たことがないですよ」と評する夫人の内助の功も味わい深い。みずからに渋く厳しく、煎られた珈琲の薫りと味は人を優しく包む。小山さんの珈琲、そのこだわりの源泉である。

philosophy



やり切っていない感じがすると、まず嫌なんですね。そのためには、やっていて面白くないとだめ。簡単にできてしまっはつまらない。かつ、これは表現しているなどと思えることじゃないと、飽きてしまう。やっていて飽きない、面白いということ、ずっとやらないと気が済まない。要するに、凝り性なんですかね(笑)。

history



チェルノブイリ原発事故、「チャレンジャー」打ち上げ失敗、日航ジャンボ機墜落。特に、チェルノブイリは記憶に残っています。県内には日本で最初の原発もあったし、安全であって当たり前だと思っていたので。茨大での「演劇祭」は忘れられません。小劇場ブームのなかで、在学している大学でその一端を担えたことは思い出深いです。

message



学生のうちにしかできない、就職するときにできないことってあるじゃないですか。だから、学生時代に面白いことは全部やっておこうという強い気持ちがありましたね。もっと面白いことがあるはずだって。ミニコミを作っている、演劇をやっている、もっとすごいのがあるはず。いつもそう思って生きていましたね。



震災から5年

茨城大学と東日本大震災
学生インタビュー

「The 茨大生」



地元・被災地を撮り続けて5年。 前に進む故郷の姿を、町民たちへ。

人文科学研究科社会科学専攻 修士課程2年生 ● 小野田 明さん

2月14日(日)、人文学部講義棟で福島県双葉町の人びとへの取材をもとに制作したドキュメンタリー映画が上映された。

福島第一原子力発電所の事故の影響で、震災から5年経った今も全町避難の状態が続くなか、双葉町の住民たち一人ひとりが故郷を見つめる。制作したのは小野田さん。双葉町の出身だ。

ショッピングモールも、映画館もない。本やCDも、コンビニでしか買えない小さな町。若者にとってはちょっと不便な町かもしれない。代わりに海的美しさがある。春には母校の桜が美しい。盆休みには帰省した先輩や後輩と一緒に飯を食う。町の運動会で懸命に走るおっちゃんたち。子どもの頃みんな叱られ、可愛がられた。小さな町の、自然な風景が、みんな、大好きだ。思いは一緒。心寄せ合う町だった。その町が、あの日から、「原発の町」と呼ばれるようになった。あれから、5年。片時も忘れることのない「地元」の双葉町の今を小野田明さんは、撮り続けてきた。

「常磐線一本で双葉まで帰れる」水戸を選び、「誰もいない家に帰る辛さ」に耐えられず、入学早々のゴールデンウィークには帰省した。「就職は、町役場に」と決め、憧れの「双葉の大人たち」とともに働くことを夢見ていた。

学生生活が始まり、わずか一年足らず。京都へ旅行し、土産を携えて双葉町へ帰る途中、静岡県の浜松付近で東日本大震災の一報を知る。父親からのメールで家族の安否はわかった。ところが、翌日、避難勧告が出され、家族は町を追われることに。

「役場で働く母は仕事とともに移動して、祖母は近所の人に中学校まで連れて行ってもらい、父は13日まで家に残り、北茨城の叔母のもとへ。みな、それぞれに避難して、埼玉で合流したときには、本当にほっとしました」――。

最初に一時帰宅が許されたのは、半年後の夏。バスで入り、小さな袋に「大事なものだけ」と言われ、通帳と写真を持ち帰った。2時間の滞在。夏の景色も、匂いも、何も変わらない。ただ散らかっているだけ。そして、人は、だれもいなかった地元での就職は断念した。原発や避難所の話題を避けるように、少しずつ双葉と距離を置き始めている一方で、「何か、やらなきゃ」という焦りは募る。留学しよう。両親に相談すると、「今しかできないかもしれないから、行ってきな



「復興」とか、「双葉」を、意識しなくなるのが、本当の復興なのかな。



よ」と背中を押してくれた。2012年4月、英国・ロンドンで小野田さんの留学生活が始まった。そこで福島を題材にした演劇に出会う。

「エジンバラ・フェスティバルという演劇祭でした。ボランティアに加わって、『これ、僕の地元のことなんですよ』と何気なくビールを配っていたら、年配の英国人が『お前の地元は、どうなっているんだ』『原発で福島はどんな状況なんだ』と、すごい勢いで訊ねてくるんですね。ところが、答えられない。双葉の今がわからなくて……」。

答えられないもどかしさを打ち払うように、福島、双葉の今を真剣に知りたくて、留学後すぐに地元の仲間と会ってインタビューを始めた。

「最初は、映画を作ろうとかじゃなくて、記録するって大事なんじゃないかと思って始めたんです。双葉の人に見てもらいたい、喜んでもらいたいという気持ちで」。

散り散りになった同級生や先輩後輩はじめ、町民を訪ねて双葉の話を聴いてまわった。動き出した双葉への思いは、ひとつの映像作品にまとめられた。

「ところが、一年ではぜんぜんわからなくて、双葉のこと。まだまだ時間がかかるし、もっと知りたい、何か形にしたいと思い、大学院に進学することに決めました」――。

院生活2年間の集大成として、小野田さんの作品はドキュメンタリー『ある町』として完成。学内では、この2月、修士課程修了に合わせて公開された。

「除染の光景など、今見ると辛いシーンもあります。震災直後は双葉を好きと思うことさえ悩む人たちがいたけど、今ははっきり、わかります。双葉じゃないと、だめなんだって。替えが効かないんだって」――。

春からは、地元のテレビ局での就職が決まっている。成人の年に見られなかった双葉の大好きな桜が、社会人となった25歳の青年の帰還をつぼみ膨らませて待っている。



①2015年夏の双葉町海水浴場。双葉町も他の被災地と同様に、甚大な津波の被害があった。変わらない綺麗な双葉の海。多くの町民が双葉の誇りとして、大好きな場所としてこの海について語る。②春の町民グラウンド。双葉町でも春には桜が咲き、夏には緑が生い茂る。町の花でもある桜。一人ひとりに大好きな桜の木があり、たくさんの思い出がある。小野田さんのもっとも好きな桜は、町民グラウンドの桜だ。③2016年双葉町ダルマ市のワンシーン。5年ぶりにダルマ市に来た同級生。震災後、自分の原点として双葉町との関わりを考えるようになった。「変わらず小規模だけど、やっぱりアットホームというか、あー双葉だなと感じられるお祭りでした」④2016年双葉町ダルマ市のワンシーン。復興支援員として働く双葉町出身の女性。恒例の「大ダルマ引き」で多くの町民が震災以前のように綱を引く姿を見て、「双葉ではないけど、双葉を思い出せる。懐かしい風景が浮かんできました」⑤夏、小野田さんの自宅前。柳通りと呼ばれ、昔は道沿いに柳の木が並んでいたという。時の流れとともに町の景色も変わっていく。平凡な道でも、小野田さんたち町民にとっては大切な場所。いつの日か、道路の先にあるゲートがなくなる景色を見たいと望む。



震災から5年

茨城大学と東日本大震災

●座談会●

「災害に学び勝つ」

震災と復興に向き合った5年、その歩みは、今も、これからも

人文学部教授●伊藤 哲司
農学部教授●小松崎 将一
工学部准教授●信岡 尚道

みずからも震災に遭遇し、研究とは何か、教育とは何かをあらためて考えさせられたあの日。この5年間の復興の歩みの中で、あらたに見えてきてきたものは何だったのか。調査・研究を通じて、茨城で、学内で、そして将来に羽ばたく学生たちへのメッセージとして、共有したい思いを3人の教員が語る。
(2016年2月23日収録)



学生たちが大洗の空き店舗でカフェを続けている。

伊藤:あの日は、後期試験前日、共通教育棟4階の教室の机に受験番号を貼っていたんです。揺れが来て、立っていられずしゃがみこんで、受験番号がたくさん舞い落ちるのを眺めていました。窓の外に理学部棟の避雷針が見えて、釣り竿みたいに揺れていたのが印象的でした。

4月に入ってから、大洗に学生たちと一緒に、イベントに参加して、大洗の人たちと話をしながら、ネットワークを立ち上げようという話になって、「大洗応援隊」を数人で立ち上げました。その活動は今でも続いていて、大洗応援隊の学生たちが大洗の商店街で空き店舗を使って、カフェを開いています。

小松崎:私は出張中で、浜松町のモノレールに乗ったところで地震に遭いました。駅で夜明かしして、家に戻ったのは翌日の夕方でした。原発のあの騒ぎのさなか、茨城で育ってその安全神話に流されていたのを自覚しました。4月になって、土壌の汚染が報告されると、農場実習は自粛。我々のフィールドサイエンスセンターでは、土と親しんで植物を育てることで健康を回復してもらおうと、大学隣の病院の患者さんたちの支援活動を定期的に行なってきましたが、それがほぼ半年くらいできなくなりました。無力感をあじわう日々でしたね。

5月になって、以前から縁があった二本松市の東和地区を訪ねたときに、地元の農家さんが、現場の農業についての調査や取り組みは何もされていないとかがあって、びっくりしたんです。東和地区では地震の被害はありませんでしたから、「空も山も川も何も変わっていないのに、全てが変わってしまった」と言う農家さんの言葉が今でも忘れられません。

信岡:私は堤防の設計などを専門にしているので、インドのスマトラ沖地震や、アメリカの大規模なハリケーンで被害を受けたところなどを見てきたことがあります。ですから、あの地震の直後に堤防が決壊したことも津波が来ることも予測はできました。日立では津波警報が出ていましたが、とにかく学生の安全確保を最優先しました。

発生直後からほぼ2カ月間、北茨城からいわき市までの区間でほぼ毎日被災状況の調査に入ったのですが、町がどんどん静かになっていくんですね。物資は届かないし、人は外へ出ない。声をかけても「大変ですね」としか言えない。いわき市の塩屋崎という灯台の麓で見かけた子どもの顔がとても老け込んでいるように見えたのは

衝撃でした。そのとき、防災教育の大切さをつくづく感じました。命があつて次が始まる。堤防だけでは命は守れないのではないかと。

「命を守る」ことに敏感に対応できる逸材として学生たちに羽ばたいてもらいたい。

伊藤:そうですね。常総市の水害もそうですが、同じことがまた起こるかもしれないという想定で、怯えというか構えを持つことはとても大事だと思います。ICAS(茨城大学地球変動適応科学研究機関)という組織の機関長を務めていますが、東日本大震災や常総市の水害などに関わるなかで、プラットフォームとしては非常にいい役割を果たしてきたのかなと実感しています。ICASは来年で10周年を迎えますが、今後も関心が薄れないよう、何ができるか検討していきたいですね。

小松崎:長い仕事になりますからね。放射性物質の問題も50年、60年の仕事になると多くの研究者は考えています。「(回復まで)そんなに時間がかかったら農業なんてできないよ」とおっしゃりたくなる方の気持ちもわかります。自分の代どころか、次の世代まで引き継がなくてはなりませんから。ただ、持続可能な農業を研究しながら思うのは、物質循環の適正化を常に監視していくことがいかに重要かということです。我々が大学でやるべきことは、どんなトレンドで放射能が減少に至ったのか、徹底的に追及していくことで、今回の事故の教訓として後世に「放射能はこう推移していったから、農産物は大丈夫ですよ」と言えるような、そんな調査結果を残したいです。

チェルノブイリの事故から30年にわたって、南ドイツで環境中の放射線の量と作物への移行を調べたところ、土壌中の放射線量は30年間それほど変わらないけれども、作物への移行は最初の1年、2年が高いだけで、3年目以降は激減するようなんです。日本の土壌というのは、地力のある非常に良い土壌です。物質を吸着する能力が強いんですね。最近のデータですが、セシウムが何らかの金属と結合して粒子状になって降下することがわかってきて、その形状ゆえに植物へは移行しにくいという説があります。そうした推移を冷静に見つめながら、農業の再生を考えることは充分可能だと思います。

信岡:昨年は、阪神淡路大震災から20年。1月17日には福島や宮城、岩手の人たちが神戸を訪れて、交流の絆を深め合いました。3月11日には神戸の人たちが東北へ。連



伊藤 哲司
人文学部教授



小松崎 将一
農学部教授



信岡 尚道
工学部准教授

携の意識があるんですね。そういう被災地の思いを共有することも、茨城には必要かもしれません。

小松崎:震災の年の暮れ以来、大学の復興プロジェクトとして、霞ヶ浦流域の放射性物質の動態を調べていますが、茨城でのこうした調査は、二本松市や福島など放射線量の高いところでの対策や研究にも役立つことを願って、この3月11日に実施するシンポジウムで報告します。

信岡:今、私が現在取り組み始めているのが、石巻市の大川小学校の被災についてです。二度と同じ悲劇を繰り返さないように、社会のリーダー、組織のリーダーがどう決断しなくてはいけないか、そういう教育を展開する道筋を模索しています。伊藤先生がおっしゃるように、人の力を高めていくために、どうリスクと向き合っていくかが非常に重要だと思います。「命を守らなければいけない」ことに敏感に対応できる逸材になって学生たちには世の中へ羽ばたいてもらいたいですね。

農家の「地域で生きていく」という強い思いに支えられて

信岡:大学だからこそできることを考えるとき、学生たちの、非常に積極的で、思考を凝らした取り組みを見るたびに、「もう一步踏み込んで何かできるのではないかと」いう可能性を感じますね。さまざまな学部の学生が集まってリスク管理を考えると、それぞれの専門やフィールドから見たリスクをどう社会の中で調和させていくかを考えるリスク・コミュニケーションという仕掛けを創っていけないかと考えています。

伊藤:災害というのは、新しい問題が生じるというよりは、もともと社会に存在する問題が顕著になるところがありますね。そうした隠れた問題が可視化される機会でもあるので、この機会をきちんと受け止めて、学生や教員を含めて、共有していきたいです。

小松崎:あの年、原発事故が起きて、作った作物が売れるかどうか分からない状況で、農家の方々は田植えをして、作物を作りました。凄いことですよ。その結果、放射性物質の影響、その値がかなり低いということまで結果的に調べることができたわけですから。こういう経験的に立証できた事実というのは説得力がありますね。その経験的な事実を積み上げていった農家の方たちの、「地域で生きていく」という強い思いや地域の力が、事故の教訓として二度と原子力災害が起こらない社会を創ろうという取り組みに活かされていくのではないのでしょうか。



写真パネルの贈呈式では、ふだん撮影指導などを行なっている勝田ロータリークラブの砂押勇人氏から講評もありました。課題提案は2つ。「動いているものを撮ろう」と「みんなが撮らないものを見つけよう」。「来年も頑張ろうね!」と生徒たちは気合を入れています。

introducing ふぞく 「特別支援学校」

自由に撮る、感性で撮る。 写真を通じて、心を映す



去る2月5日(金)から8日(月)までの4日間、水戸キャンパス図書館1階のインフォメーションラウンジで、教育学部附属特別支援学校の生徒たちが撮影した作品展『Yadokari Photo Club 写真展～あなたの視点が変わる～』が開催された。飾られる作品一つひとつには、生徒たちの「表現」が映し出されている。それは、特別支援学校の教育現場の表情でもある。

附属特別支援学校が、勝田ロータリークラブ(ひたちなか市笹野町)から毎年一眼レフカメラの寄贈を受け、中学部、高等部の授業で写真撮影を取り入れて5年。写真展は、高等部の生徒たちが月1回ほどのペースで美術などで撮りためた数ある写真から、同ロータリークラブの砂押勇人氏が展示作品を選定。「もっと多くの方に見てもらう機会があるといいですね」という三村信男学長の提案を受け、学内で初めての展示が実現した。

ラウンジの壁には、高等部22名の作品がずらりと並ぶ。花あり、影あり、ブランコあり。テーマはさまざまで、選ばれた作品に、生徒それぞれがタイトルを付けた。

「行列のできるベンチ」「地面の五線譜」「ネギの生長」など、ネーミングもユニークだ。

おそらく、もっとも刺激を受けているのは現場の教師たち

ちだろう。高等部主事の櫻井幸子教諭は「一年生は入学して初めての体験。先輩たちの作品を見ながら、身近な空間、教室や生徒たちで過ごす場などで撮りたい題材を探します。物や人が多いですね。2年生、3年生は昨年までの経験を活かして、新たな挑戦をしています」と語る。「中学部時代、撮られることには慣れていましたが、今度は自分が撮る立場。本格的な一眼レフで撮ることもあってか、ちょっと大人になった気分でしょうね」(櫻井教諭)と成長にはほほ笑む。

その子の、その場の感性を大切に。だからであろう、「写真を趣味にされている方がよく、『恰好つけていない写真ですね』とおっしゃるんですよ。」(展示会担当・廣木聡教諭)

正保春彦校長は、「表現する機会を増やすことは、教育上とても大切です。その写真を見て、われわれも子どもたちを理解していくことが大切ですね」と写真に込められた生徒たちの宇宙に思いを巡らす。生徒たちの作品が刷られた校長の名刺も、大好評だ。

レンズを通した生徒たちの作品作りは、この春も続く。驚きと感動の被写体は、学校を明るく、楽しい空間にしてくれる。

教育学部附属特別支援学校
〒312-0032
茨城県ひたちなか市津田1955
電話: 029-274-6712

1977年4月創立。個に応じた教育の実践と研究に取り組んでいます。児童生徒は小学部・中学部・高等部合わせて53名、教員30名の構成。小・中学校に比べて教員一人あたりの児童生徒数が少ないのが特色のひとつです。学生の教育実習の場であるとともに、児童生徒の自立と社会参加を目指した教育を大学と連携しながら進めています。

このシリーズでは、教育学部附属学校および園を紹介します。

UP TOPICS

大学の今がわかる、教員、職員の今がわかる。
そして、学生の今がわかる、ここは茨大、われらのコミュニティ。

IBARAKI UNIV.
PRESS

わたしの仕事

イバタイ
ガジェット

キャンパス探訪

Ibaraki University
Why don't you
write in
English?
英語で書いてみよう!

チェコの手窓から

IBARAKI UNIV. PRESS

茨城・ベトナムの未来を紡ぐ国際シンポ

国際



ハノイ科学大学グエン・ヴァン・ノイ学長が来日

去る2月3日(水)、水戸市内のホテルで国際シンポジウム「茨城とベトナムのこれからの関わりを考える—サステイナブルな協力・貢献とグローバル人材の育成」が開催されました。本学学生や教職員のほか、ベトナムとの交流事業に関わる自治体や民間団体の関係者など、約180人が参加。シンポジウムには山口やち糸副知事、懇親会には橋本昌典知事が出席しました。

シンポジウムでは、元駐ベトナム日本大使で茨城県出身の坂場三男氏が基調講演を行い、日本で働くベトナム人の急増や、昨今のベトナムの近代化の速さに言及し

ながら、両国の連携と将来の展望について語りました。

続いて開かれたパネルディスカッションでは、東京大学名誉教授で、ベトナム日本大学の設立を進めている古田元夫氏、ハノイ科学大学のグエン・ヴァン・ノイ学長、茨城県国際課長の清瀬一浩氏が登壇し、日本とベトナムとの協働による人材育成の現状と課題について報告がありました。本学からは新田洋司・農学部教授と、司会を務めた伊藤哲司・地球変動適応科学研究機関長が、大学での取り組みを紹介。会場からは、農業分野の人材育成での初等・中等教育の重要性や、ベトナムでの高齢

化社会の推移などについて意見や質問も出され、活発な議論が交わされました。

会場では、ベトナムでの国際インターンシップを体験した学生らやベトナム進出を進める企業・団体によるポスターセッション、ベトナムの楽器トルンの演奏も交えた懇親会も催され、ベトナムに関わる参加者間の親交の場となりました。

ベトナムから本学への留学生は、中国出身の留学生に次いで2番目に多く、AIMSプログラムなどを通じて東南アジアとの研究・教育交流が強化されています。特に、日本とベトナムの両政府の合意のもと設立が進められている「ベトナム日本大学(日越大学)」では、2017年度に開設される気候変動分野のプログラムにおいて、本学は中心的な役割を果たす予定です。今回のシンポジウムは、長年の民間交流の実績をベースに農業やビジネス、観光分野でのベトナムとの連携を深めている県の関係者も含めて、さまざまな分野でのベトナムとの交流・親睦の発展に強い期待を感じさせるものとなりました。

Study
研究

三宅島噴火跡地の調査で特有の微生物生態系を解明—農学部のメンバーら



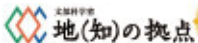
農学部の藤村玲子特任研究員(調査当時/現東京大学大気海洋研究所所属)と太田寛行教授らのグループが、2000年の三宅島噴火の火山灰堆積物の微生物生態系を10年間にわたって調査し、火山ガスに曝された環境下における生態系遷移とその要因を初めて明らかにしました。

三宅島の堆積物では、二価鉄(Fe²⁺)をエネルギー源として利用する微生物がバイオニア生物として生息していることがわかりました。これは、他の火山環境(ハワイ島キラウエア火山やフィリピンのピナツボ火山など)に生息する微生物とは異なるユニークな生態系です。さらに、継続的に群集遷移を調査した結果、このユニークな生態系は、火山ガスとして排出される亜硫酸ガスによる環境変化が影響している可能性も明らかになりました。この新たなプロセスの発見は、火山灰からの土壌形成メカニズムを解明する学術的な成果だけでなく、火山噴火後の環境再生に関する有用な知見につながるものだといえます。

Community

地域

「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COCプラス)」結団式



2月26日、文部科学省平成27年度「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COCプラス)」に協働して取り組む県内の各機関とともに、同事業の実施に向けた結団式を開催しました。

文部科学省の補助金事業であるCOCプラスは、「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」を発展させ、大学と地方公共団体、企業等との協働による魅力ある就職先の創出や教育カリキュラムの改革を支援するものです。

茨城大学は代表校として、茨城キリス

ト教大学、茨城県立医療大学、茨城工業高等専門学校、常磐大学の各高等教育機関と茨城県、NPO法人雇用人材協会、茨城産業会議と共同で、「茨城と向き合い茨城に根ざし、未来を育む地域共創人材養成事業」を申請し、昨年(2015年)10月、採択されました。

結団式では、各機関の代表者が登壇してそれぞれ決意表明を行った上で、壇上で一列に並んで手をとりあい、これから連携して地方創生に取り組んでいくことを確認しました。

同事業では今後、各機関の協働による県内のインターンシップの促進や、各大学・高専間での地域志向科目の共有などに取り組んでいきます。



Education

教育

学生の企画で仏漫画「バンド・デシネ」作家アジア初の個展を開催

水戸キャンパス図書館1階の展示室で、1月7日~18日、ベルギー生まれのバンド・デシネ(フランス語圏の漫画の総称)の作家、ジョゼ・パロンド氏の作品を紹介する個展が開催されました。パロンド氏は1995年に初めての作品を出版、2015年現在で著作は39冊を数え、日本でも絵本が翻訳されています。今回の展覧会は、アジア圏で初めてのパロンド氏の個展で、書きおろしの作品解説も寄せられました。

この展覧会は、人文学部の専門演習科目「視覚表現論」の授業活動として、学生15人が中心となって企画・運営を行いました。また、作品の翻訳作業も、教養科目のフランス語の授業の一環で学生たちが取り組みました。展示空間のデザインや設営にあたっては、京都国際マンガミュージアムの元空間デザイン担当者の協力も得て、本格的な指導を受けながら作業を進めました。会場には、大きなタペストリーにプリン

トされた作品や、キャラクターを象ったパネルが散りばめられ、パロンド氏につくったBGMとともに、作品の世界観が体感できる工夫がされていました。



春休み、長いので青森に帰ろうかな。それも旅行でも行ってみようかな。



7

俺、平均点より上だったけど。気のせい、気のせい。おまえ、ゲームばっかしてたぞ!



3

音楽やってて、ありきたりですけど、交流関係とか、深まって、よかったです。



今ですか。お弁当、買ってきました。スープとおにぎり。



5

2

まだ試験中ですね(笑)。自主トレは好きなんで、やらないと、なまっちゃうんですよ。



4

今から授業です。春休み、ですか。アメリカに帰ろうかな。



1

一人暮らしは、わりと慣れました。自炊もします。外食のほうが多いかな(笑)。



CAMPUS VIEW

OBカメラマン金田幸三のキャンパス探訪 @水戸キャンパス

2月の水戸キャンパス。久しぶりの母校を小雨混じる曇天のもと、のんびり歩いた。それぞれの時間をそれぞれの空間で送る、普段と変わらぬ茨大生たち。本読んだり、弁当食ったり、ダベったり…。ぼくの頃とは違うような、変わらないような。そんなささやかな空気がひそかに嬉しかったりする。ありのままの茨大の姿、撮ってみました。

1 明瀬一真さん 木ノ内初実さん 農学部1年生

「(デザートを食べながら)授業までの時間がちょっとあるんで。人文の東洋科学の授業です。(出身は)東京、彼女は静岡。この一年は、いろいろな県から来ている人と友だちになって、自分の知らない話がたくさん聞けて楽しかったですね。」(生協にて)

2 三好遼平さん 理学部2年生

「まだ試験中ですね(笑)。試合は5月に関東学生リーグっていうのがあって、始めたのは、入学してからですね。最初はぼこぼこにされるんで辞めたくるんですけど、強くなればなるほど、もっと上の人とやりたいなって。」(部室にて)

3 濱田涼さん 理学部3年生

「あっちが吹奏楽部で、こっちがオーケストラ。試験も終わって、次の演奏に向けて。東海村の研究室にいますけど、あっちの寮に入ろうと思って、あんまり練習できなくなっちゃうんですけど、6月18日に管弦楽団で演奏会やるんで、ぜひ。」(サークル棟にて)

4 John Saddekniさん Cassandra Briggsさん 留学生

「ふたりともアメリカからの留学生。僕はアラバマ、70年代に父がシリアから移民しました。彼女はペンシルベニアから。僕と同じく、去年の秋から茨大で勉強しています。僕は今年の8月まで、ここで国際学の勉強をしています。」(留学交流室にて)

5 後藤加奈さん 飯嶋美里さん 大学院教育学研究科専修2年生

「おにぎりの名前はえつと…180円です。大学院の2年です。(この春、卒業?)はい。茨城と栃木で、養護教諭になります、保健室の(どこで食べるの?)院生室で。(行ってもいいですか)ええ〜(笑)」(教育学部棟外)

6 明土佳奈瑛さん 教育学部美術選修2年生

「図書館でちょっと勉強してから帰ろうかって。今日、一限にテストがあったので。わりと出来たかな。初等教育の算数。美術科ですけど、いちおう、教員養成なので。来年はゼミもあるし、でも、ちょっと迷って…」(大学図書館にて)

7 教育学部数学選修の2年生たち 教育学部数学選修2年生

「とりあえず、来週の試験。あいつが一番、ヤバい(笑)。マジ、ムズい。俺だって、30点は超えたよ、さすがに。(よく学科のみんなで勉強するの?)そうですね、一人じゃ、なかなか理解できない。三人に寄れば文殊の知恵(笑)。烏合の衆だろう!」(大学図書館にて)

わたしの仕事 Vo.1

昨年4月から学生就職センターに所属。学生対象の就職ガイダンスの運営企画に携わる。春、学生たちの企業との接触が始まる。4年生よ、心して聞いてね。

「予定をしっかり把握しておくこと。就職支援サイトなどからのメールを見落とさないように。いつでも人と会える準備しておくのが大切ですね」。

なるほど。でも、そう言うわりには、堀口さん、結構緊張していますね。根っからの上がり症かも・・・。

「いろいろな情報が入ってくる時代ですから、学生たちも自分でどんどん就職活動を進めていける時代です。でも、自己流でやってきて、途中で行き詰ってしまう学生も少なくないですよ。大学にも情報はいっぱい入ってきますから、ひとりで悩まずに、気軽に訪ねて来てほしいです」。

そうそう、堀口さんも気軽に行きましょう、気軽に。学生時代、社会学を学んだとか。

「はい、人の認識が行動にどう影響を与えるのか。大学の仕事で、ですか……。先生との関係のちがいですか」。

プロフィール

2008年採用。最近では、ロードバイクでサイクリングを楽しむ。息抜きは「あまり考えないことをすること」「玉ねぎを徹底的にするとか(笑)、大好きです」。



学生就職支援センター
堀口 真理さん

ね。今までは「先生」「学生」だったものが、同じところで働く立場になって、最初はちょっと戸惑いましたね。

関係性の変化というわけですね。職員になって、行動の変化はありましたか。

「学生時代に、『これくらいはいいでしょ』と思っていたことが、『うわぁ、これって大迷惑だったんだ』とわかったことが多々ありまして(笑)。裏方の立場がわかるようになったというか」。具体的に……。内緒?そうですか。残念。

最後に、就活にあたって、学生へのメッセージをひと言。「自分が将来をどうなりたいかをよく考えること、そして、大学生生活を楽しむこと。かならず、就活に生きてくることになります」。

Ibaraki University

Why don't you
write in
English?

英語で書いてみよう!

今回のチャレンジャー 吉田直記さん 人文学部 2年生

この春、ベトナムへ留学します。その近況を英語で書いてみました。

I have been interested in the wage gap problem in Vietnam. I visited Vietnam last year and realized the difference between life styles of the rich and the poor. At that time, I wondered why their lives were so different, and therefore, since then, I have wanted to solve this problem. I will go to Vietnam next month and stay there for a year. During my stay, I will attend college and research more about this problem.

I tried,



問題解決のために、現地の大学へ留学しようと考えてるのは素晴らしいですね。文の構成もよくできています。最初の文と2つ目の文を、現在完了を上手に使って、「since」でつなげるといいでしょう。留学先での活躍を期待しています!

I have been interested in the wage gap problem in Vietnam since I visited there last year and realized the difference between life styles of the rich and the poor.

information

英語のネイティブスピーカーとのマンツーマンのレッスンが受けられる『英語コミュニケーション・トレーニング』(予約制)が4月からスタート!毎週水曜日、水戸キャンパス図書館2階グループ学習室で開講。1人30分、2~3名でもOKです。お問い合わせは学務課履修指導グループ(共通教育棟1号館1階)まで。

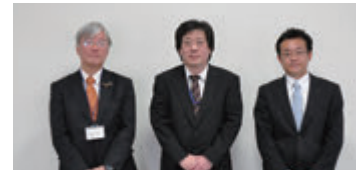


藤井 拓哉 大学教育センター講師
3歳~6歳までと15歳~24歳までをアメリカで過ごす。
オハイオ州立大学、同大学院で教育学を学び、日本語の教員免許とTESOL(英語を母国語としない方のための英語教授法)を取得。現在、茨城大学で総合英語を担当。

イバダイ ガジェット



ポータブル環境測定器C2D-PEM01



「片手で持てるサイズにセンサーを詰め込むのがたいへんでした」と、開発担当の神澤さん(写真中央)。2ヶ月かけて完成させ、すでに大学の授業で試用している。各種学会でも好評だ。(写真右が森事業部長、左が齋藤特命教授)

【クリエイター】

工学部防災セキュリティ教育研究センター副センター長 齋藤 修 特命教授
株式会社ユードム 取締役・環境システム事業部長 森 淳一さん
環境システム事業部プロジェクトリーダー 神澤 雅典さん

スマホで写真を撮ると同じ感覚で、CO2濃度などの環境情報を記録できる!・・・そんな日が、数年後には現実になるかもしれない。

石けん箱くらいの大きさの容器に、CO2濃度・温度・湿度・気圧をそれぞれ測るセンサーが詰め込んである。それをbluetoothでスマホにつなぎ、専用の無料アプリを開く。画面の「送信」をタップすると、GPS(位置)情報と一緒に測定値が記録されて、オンライン地図に表示される(写真中右)。まるでSNSのような手軽さだ。

開発した株式会社ユードムは、今年創立40年を迎える、水戸市に本社をもつシステム会社。CO2濃度を簡単に測れる同社のセンサーに工学部の齋藤特命教授が興味を持ったのがきっかけだった。去年、地球変動適応科学研究機関(ICAS)から、「学生たちが環境問題をもっと意識できるようなシステムがほしい」と相談され、事業部長の森さんたちが提案したのが、この「ポータブル環境測定器」である。

市販への道のりはまだ遠そうだが、齋藤特命教授は「多くの人々が気軽に環境情報を測定できるようになれば、ビッグデータが生まれますからね。活用の可能性は無限大ですよ」と言う。茨城ならではの産学連携の、夢のある製品開発。テストは順調に進んでいる。



街並みと建築の物語

チェコの車窓から①

茨城大学の教員としての最初の1年がまもなく過ぎる。担当はヨーロッパ史だが、狭い意味での専門はチェコ・東欧近現代史だ。

1989年の社会主義崩壊から4半世紀を過ぎ、チェコという国は日本でもずいぶん知られるようになったし、読者の中にも、既にこの地に足を踏み入れた方もいらっしゃるかもしれない。2013年統計によれば、チェコ共和国に進出した日本企業は232社を数え、日本から訪れた観光客は13万人にも達した。なかでも首都プラハは「世界遺産」の街として、世界各国から多くの観光客を集めている。

チェコ、とりわけプラハが人々を魅了する理由としては、やはり中世からのヨーロッパの街並みが美しく残されていることにあるだろう。街を貫くヴルタヴァ川——日本では「モルダウ」として知られる——とカレル橋、雄大なプラハ城が織りなす風景は息をのむ。旧市街広場の天文時計やユダヤ人シナゴグも、訪問者を中世の世界に誘ってくれる。またプラハは音楽・演劇の街でもあり、上質のコンサートと劇場空間が楽しめる。雑貨やアニメーション



ヴルタヴァ川に見るプラハの街並み(撮影:森下)

ン、味わい豊かなチェコビールを目当てに訪れる方もいるだろう。……と、ここまでご紹介したのは、チェコの「表の顔」。次回からは、それとは異なる別の角度からこの国の歴史に迫ってみたい。街並みと建築、とりわけ「住宅」という視点を通して見える中欧の小国チェコの歴史の世界へ、シュチャスノウ・ツェストウ(いざ出発)!

プロフィール

森下 嘉之
1978年生まれ。兵庫県神戸市出身。神戸大学文学部卒業、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士。博士(学術)。この間、チェコ政府奨学生としてチェコ・プラハに留学。日本学術振興会、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターを経て2015年より現職。

研究に恋して①

Study my love

宇宙天気予報

「宇宙天気予報」という言葉がある。といっても、宇宙服を着たお天気キャスターが「木星の明日の天気は晴れときどき曇りでしょう」「明日の土星は寒いのでコートが必要ですよ」といったことを伝えてくれるわけではない。国内旅行のような感覚で宇宙の旅ができるようになれば、そんな天気予報も出てきそうだが…。

宇宙空間での活動にあたって、太陽風の影響や宇宙放射線の強さといった情報はとても重要だ。そうした情報を予報するのが「宇宙天気予報」。ところが、どんな強さの太陽風や放射線が人工衛星にどんな影響を与えるのかは解明されていないし、宇宙天気予報自体、精度は高くても70%、低くても0%(!)というのが現状。とはいえ、宇宙天気が地球の気候にも影響すると主張する研究者もいるようなので、気にしないわけにもいかない。

宇宙天気予報の精度を上げるには、太陽について正確に知ることが不可欠。人類は太陽観測の技術を進化させてきたが、それでも分からないことばかり。そんな中で注目を集めるのが、太陽の一番外側の層である「コロナ」の活動だ。コロナ層でも大きな磁場が働いており、それが宇宙天気予報の重要な手がかりになるのだが、今の観測技術ではせいぜいコロナ層の磁場とその下の彩層の磁場が混ざった状態でしか把握できない。

そのコロナ層の磁場の測定に学生生活を捧げてきた

のが、今年3月で理工学研究科を修了する宮脇 駿さんだ。指導教員の野澤 恵 理学部准教授らとともに、全国の大学・研究機関の太陽観測ネットワークや人工衛星の観測データを駆使して挑戦してきた。そして彼が見つけた方法が、磁場が強いポイントではなく、ちょっと弱い箇所注目するというもの。磁場が弱めのポイントであれば、彩層の磁場も弱くなるため観測上は無視できるかも知れない、と考えた。「相手の正体を知るには、強いところより弱いところを見るべし」って、なんだか人間関係にもあてはまりそう…。

実際この方法によって、コロナ層の磁場の把握に先行研究よりもぐっと近づくことができた。また、今まで理論的に導き出されていたモデル値の限界も見えた。太陽の表面にはアポロのような足跡は残せないが、太陽観測の世界に大事な一歩を踏み出した。



<論文タイトル>Coronal Magnetic Fields Derived from Simultaneous Microwave and EUV Observations and Comparison with the Potential Field Model
<著者名>Shun Miyawaki, Kazumasa Iwai, Kiyoto Shibasaki, Daikou Shiota, and Satoshi Nozawa
<雑誌名>Astrophysical Journal, 818, 8 (11pp) <掲載日>2016年2月10日

このシリーズでは、本学の教員・学生による学術論文をもとに書いたエッセイを連載します。

編集後記

■キャンパスに身を置き、学生や教職員、その他大学に来るいろんな人と接していると、知が蠢くダイナミズムを日常的に感じられるのですが、それはもしかしたら広報室という仕事ゆえかも知れない。でもこの実感をなんとか多くの人たちとも共有したい!その思いで新『iUP』の制作に取り組みました。受け取ってもらえたでしょうか。(yam)

■茨大に就職して一年。右も左もわからぬまま広報誌の刷新にとりかかり、ようやく刊行となりました。校正の過程で消えていったネタも、どこかの機会でご紹介できればいいなど。今回は水戸を中心に取材しましたが、次号からは日立キャンパスと阿見キャンパスの景色もお届けしたいですね。どうぞお楽しみに!(加)



車椅子バスケットボールチーム

分け隔てなく、だれもが楽しめるイスバスに集う。

車椅子に乗ってプレイするバスケットボール、それが車椅子バスケットです(以下、イスバス)。選手が車椅子に乗ってプレイすること以外は、ゴールの高さやボールの大きさ、試合時間、基本的なルールまで、すべて一般的なバスケットボールと同じです。車椅子に乗ることで身長は低くなり、ゴールまでの距離は遠くなりますから、慣れるまではゴールの高さにボールを投げるだけでもたいへん。でも、コツを掴んだ選手は、スリーポイントシュートも軽々と決めてしまいます。

1つのボールを巡って車椅子が激しくぶつかりあう様子は迫力満点。車椅子を駆使しての華麗なプレーで、この競技ならではの魅力たっぷりです。障がい者だけでなく、健常者、バスケットの経験未経験を問わず、分け隔てなく楽しめるところがこのスポーツの哲学でもあります。

水戸でイスバス普及に取り組む齋藤信之さんの練習会に、キャプテンの大槻倫成さん(理学部3年生)が参加したことが、茨大イスバス誕生のきっかけになりました。ゴール下で車椅子どうしがぶつかりあう迫力の攻防や、車椅子を自在に操っての華麗なボールさばきに魅了された大槻さんは、2015年10月にサークル登録。現在の正式メンバーは3名ですが、週3回の練習には、入れ替わり立ち替わり、様々な人が体験に訪れています。

「イスバスのもうひとつの魅力は、大学から始めてもスタートラインが一緒なこと」と語る大槻さん。イスバスの競技人口はまだまだ少なく、発展途上のスポーツのため、全国ランキングの上位を目指しやすいスポーツでもあり、現在、この夏の選手権大会に向けて、社会人チームと合同練習を重ねています。



車椅子バスケットボールチーム

2015年10月発足。男女混合で、現在メンバーは3名、週に3回、水戸サンアビリティーズ体育館にて練習を行なう。新年度からは福祉施設や学校での体験会や普及イベントにも積極的に参加していく予定。
連絡先: ibadai.isubasu@gmail.com
練習日: 毎週火・木・土
練習場所: 水戸サンアビリティーズ体育館



茨城大学図書館の 土曜アカデミー

すべての事業が
無料です。

申し込みも
不要です。

どなたでも
ご参加
いただけます。

主催●茨城大学図書館 共催●茨城大学COC統括機構 社会連携センター
後援●茨城大学人文学部市民共創教育研究センター

[くるま座] 談会

21世紀のサステナビリティ学を語ろう!

[会場] 茨城大学図書館本館1階ラーニングcommons
[後援] 茨城大学地球変動適応科学研究機関 (ICAS)

「PM2.5やオゾン:広域・越境大気汚染と気候変動」

[日時] 5月7日(土) 13時~15時

新興国で激化する大気汚染と日本への影響、さらに気候変動との関連について紹介し、理解を深め語りあいます。

[話題提供] 北和之(茨城大学理学部教授)

「有機農業について語ろう!」

[日時] 7月2日(土) 13時~15時

いま、有機農業が地域に広がりつつあります。ここでは、様々な有機農業について紹介し、自然と農業の共生について意見交換します。

[話題提供] 小松崎将一(茨城大学農学部教授)

ブック・カフェ

[会場] 茨城大学図書館本館1階ライブラリーカフェ(エントランスホール集合)
[後援] 人文学部西野ゼミ

① [日時] 5月14日(土) 13時~15時

アーサー・コナン・ドイル 「赤毛組合」

『シャーロック・ホームズの冒険』
創元推理文庫(972円)など。

② [日時] 6月18日(土) 13時~15時

エミール・ゾラ「シャープル氏の貝」

『オリヴィエ・ベカイユの死/呪われた家』ゾラ傑作短篇集。光文社古典新訳文庫、2015年、1210円。『水車小屋攻撃 他七編』岩波文庫、2015年、929円など。

③ [日時] 7月9日(土) 13時~15時

カレル・チャペック『ロボット』

岩波文庫、2003年、648円。または、アイザック・アシモフ『われはロボット』アシモフのロボット傑作集。ハヤカワSF文庫、2004年、782円など。

[ナビゲーター(講師)] 西野由希子(茨城大学人文学部教授)

*テキストはお持ちのものなど、どの出版社の版でもかまいません。

できるだけ、事前に読み、当日その本を持っておいで下さい。お好きな回だけの参加も可能です。

*お飲み物代は各自ご負担いただけます。

■館長講座「中世茨城[常陸・北下総]のものふたち」

① [日時] 5月7日(土) 15時30分~17時

[内容] 「常陸守護・八田知家とその一族」

② [日時] 7月9日(土) 15時30分~17時

[内容] 「源頼政と下河辺氏」

[講師] 高橋 修(茨城大学図書館長 人文学部教授)

[会場] 茨城大学図書館本館3階ライブラリーホール

■COCの公開講座 「茨城学への招待」

[日時] 5月21日(土) 13時~15時

[講師] 清水恵美子(茨城大学社会連携センター准教授)

[内容] 「岡倉天心と六角堂と『茶の本』」

[会場] 茨城大学図書館本館1階ラーニングcommons

■新著を語る 長田華子『990円のジーンズがつくられるのはなぜ?』

[日時] 6月4日(土) 13時~16時

[講師] 長田華子(茨城大学人文学部准教授)

[会場] 茨城大学図書館本館3階ライブラリーホール

[内容] 「ザ・トゥルー・コスト ファストファッション 真の代償」

上映会&著者によるトーク

■土曜美術館 doyoBi ①

[日時] 6月18日(土) 13時~14時30分

[講師] 藤原貞朗(茨城大学人文学部教授)

[内容] 「山下清と昭和の美術」

[会場] 茨城大学図書館本館3階ライブラリーホール

■サイエンスカフェ 「素粒子で感じる宇宙」

[日時] 7月16日(土) 13時~14時30分

[講師] 百武慶文(茨城大学理学部准教授)

[会場] 茨城大学図書館本館3階ライブラリーホール

■古文書寺子屋 はじめの一歩

[日時] 7月30日(土) 13時~16時30分

[講師] 千葉真由美(茨城大学教育学部准教授)

添田仁(茨城大学人文学部准教授)

木戸之都子(茨城大学人文学部助手)

[内容] 茨城大学図書館に収められている古文書を読んでみませんか?

[会場] 茨城大学図書館本館1階ラーニングcommons

茨城大学図書館 〒310-8512 水戸市文京2-1-1 茨城大学水戸キャンパス
(お問い合わせ) 茨城大学図書館 TEL:029-228-8076 Mail:ser-lib01@ml.ibaraki.ac.jp